

日付 : 2020年2月13日(木)
出席者 : 97名
主な質疑応答 :

Q1 : イクシス LNG プロジェクト (以下、イクシス) について、2020 年度 (以下、今期) の利益貢献のアップサイドは何か。また、イクシスの LNG の一部が、スポットカーゴとして販売されているようだが、足許のスポット価格の下落は今期のイクシスの利益貢献にどの程度影響するのか。

A1 : イクシスの最終利益貢献は、2019 年度 (以下、前期) は 9 ヶ月間 (4-12 月) で 750 億円程度、12 ヶ月間 (1-12 月) で 950 億円程度であったが、今期は 1,050 億円程度の見込み。今期はプラトー生産 (LNG 年間 840 万トン以上を安定的に生産できる状況) を前提としているが、今後も生産能力である 890 万トンの生産を目指しており、アップサイドの一つ。また、引き続き OPEX の削減・最適化にも取り組んでいる。一方で、LNG 年産 840 万トンについては長期販売契約で販売されるが、顧客の事情等により一部が先送りになるケースがあり、スポット販売も一部行われている。スポット販売の影響は限定的ではあるものの、この点は利益貢献のダウンサイドの一つと考える。

Q2 : ROE について、前期は 9 ヶ月決算で 4.1% であり、油価が足許水準で推移すれば、今期は 5% 程度を見込めると思うが、自社株買い等を含め、資本効率をもう一段改善させる上での今後の方針は。

A2 : 資本効率に関する市場の期待は十分承知している。自社株買いは株主還元の見返りの一つとして将来的な検討課題と認識しているが、前期は年間配当 30 円、今期は年間配当 36 円 (予想) と、まずは配当を中心に株主還元の強化を進めていく方針。なお、フリー・キャッシュフローは着実に改善しているが、元本返済もあるため、その点留意する必要がある。

Q3 : 今期のイクシスの利益貢献見通し 1,050 億円程度について、「長期契約における一部の LNG カーゴが先送りになるケース」等のダウンサイドリスクは、どの程度織り込まれているのか。また、前期 10-12 月の 3 ヶ月間のイクシス最終利益貢献が 350 億円程度とのことだが、前期 7-9 月の 3 ヶ月間の最終利益貢献 200 億円強から大きく伸びた要因は何か。

A3 : 今期のイクシスの利益貢献見通し 1,050 億円程度という業績予想は、期初時点の今期出荷見通しを踏まえたものであり、出荷見通しには長期販売契約カーゴ及び一部スポットカーゴが含まれる。足許のスポット価格を踏まえると、期中にスポットカーゴ数が更に増えた場合は、ダウンサイドとなる。

また、前期 10-12 月の 3 ヶ月間のイクシス最終利益貢献が大きく伸びた要因として、出荷ベースのカーゴ数と、会計上のカーゴ数に差異が生じた点が挙げられる。また、ナフサ価格高騰等に伴い、コンデンセート等の販売価格が想定より上振れたことも要因の一つ。

Q4：今回の増配に向けては、どんな議論があったのか。また、中期経営計画 2018-2022（以下、中計）発表以降の配当性向は、今期の見通し含め 30%台半ばが続いているが、何か意図があるのか。

A4：中計で示している通り、安定的な配当を基本とし、業績の成長に応じて段階的に株主還元を強化していくことを株主還元の基本方針としている。前期は、好調な業績を踏まえ、期末配当を昨年 11 月予想の 15 円から 3 円増配となる 18 円とし、これにより年間配当金を 30 円とした。配当性向については、中計では 30%「以上」としている点を改めて強調したい。

Q5：イクシスとアバディ LNG プロジェクト（以下、アバディ）以外で、今期・来期・再来期において純利益貢献が期待できるプロジェクトは何か。

A5：当社が参画するアブダビの油田プロジェクトにおいては、各油田の生産能力を引き上げるべく開発作業が進行中であり、中長期的な生産増・利益貢献増を期待する。また、前期から利益に貢献している米国のシェールオイル・プロジェクト、追加開発を予定するアゼルバイジャンの ACG 油田、更にはプレリユード FLNG プロジェクト等の今後の利益貢献にも期待している。

Q6：社長就任から約 2 年程度が経過したが、この期間で地球温暖化問題等を含む外部環境はどう変化していると考えるか。

A6：地球温暖化問題とその対策等の外部環境については、直近数年間で急速に変化していると感じている。今後の世界のエネルギー需要見通しにおいては、2040 年においても石油・天然ガスは一次エネルギーの約 5 割を担うというシナリオがあるが、事業の低炭素化に向けて、まずはガスシフトを進め、また、再生可能エネルギーへの取り組みも強化している。更に、今後はカーボンリサイクルの一つであるメタネーション技術等の新技術の確立も目指していく。

Q7：イクシスとの比較において、アバディをどのように見ているか。

A7：まず、アバディは開発コンセプトがイクシスと類似しているが、ガス田に含まれる液分がイクシス程は多くないため、CPF の建設予定はない。また、アバディはガス田性状が非常に良好であり、イクシスはプロジェクトライフで 50 本程度の井戸を掘削予定である一方、アバディは 15 本程度の予定。更に、インベストメント・クレジット等の非常に良好な財務条件を確保している。アバディの FID に向けては、今後の FEED 作業の中でコスト等の詳細も詰めていくことになるが、それと同時に、バイヤーの確保が重要と考える。

Q8：前期のバレル当たりの生産コストは 5.3 ドルであるが、中計における 2022 年度目標の 5 ドルに向けて、イクシスの生産コスト削減にはどのように取り組むのか。

A8：まずは、既存の生産設備・体制において、安全・安定操業を継続しつつ、生産コストの削減・最適化に取り組んでいく。また、拡張戦略については現時点で具体的な計画等はないが、今後、追加 LNG トレインを建設した場合は、生産コストの更なる削減が期待できる。

Q9：イクシスの順調な生産・操業等により、中計で示す 5 年間累計の営業 CF2.5 兆円が上振れた場合、上振れ分はどのように配分するのか。

A9：その時点での油価などの事業環境、投資機会の有無等、様々な要素を勘案しながら決定するが、資金配分の優先順位は、有利子負債削減、株主還元、成長投資の順番

であり、中計の方針から変更はない。なお、今期はイクシスの大規模メンテナンスを予定していないが、現時点では来期・再来期は大規模メンテナンスを予定している。

以上

注意事項：

本書に記載される情報は、当社の計画と見通しを反映した、将来予想に関する記述に該当する情報を含んでおります。かかる将来予想に関する情報は、現在入手可能な情報に鑑みてなされた当社の仮定および判断に基づくものであり、これには既知または未知のリスク、不確実性およびその他の要因が内在しております。かかるリスク、不確実性およびその他の要因は、かかる将来予想に関する情報に明示的または黙示的に示される当社の将来における業績、経営結果、財務内容に関してこれらと大幅に異なる結果をもたらす可能性があります。かかるリスク、不確実性およびその他の要因には下記のものが含まれますが、これらに限られるものではありません。

- 原油および天然ガスの価格変動及び需要の変化
- 為替レートの変動
- 探鉱・開発・生産に関連するコストまたはその他の支出の変化

本書に掲載される情報（将来予想に関する情報を含む）を、その掲載日後において、更新または修正して公表する義務を負うものではありません。